

『リトル・ダンサー』

2000 年／イギリス／スティーヴン・ダルドリー監督作品

バレエダンサーが舞台上で羽ばたく一瞬 格闘技に相通じる力強さ

会員 藤崎 太郎 (62 期)

『リトル・ダンサー』
価格 Blu-ray ¥2,000+ 税
発売元・販売元
株式会社 KADOKAWA



1984 年、激しいストライキに揺れる英国北部のダーラム（ロンドンから 400km 超）の炭鉱町が舞台である。主人公は 11 歳のビリー、最愛の母親はすでに他界し、炭鉱労働者の父と兄、物忘れがひどくなった祖母の家族 4 人で暮らしている。通っていたボクシング教室の隣で練習していたバレエ教室に心惹かれ、父親に内緒でバレエ教室に参加しはじめる。バレエに対して偏見を持つ父親は猛反対するが、それに反比例するようにビリーはバレエに夢中になっていく。ビリーの潜在能力と可能性に気付いたバレエ教室のウィルキンソン先生による個別レッスン（父親に内緒）を受け、ビリーは英国ロイヤルバレエ学校のオーディション受験を勧められるまでに上達するが、父親は依然としてバレエに理解を示さない。

ストライキの影響で暗く沈んだクリスマスの夜、鬱屈した思いを発散させるかのごとく、情熱的に踊るビリーの姿を目の当たりにした父親は、息子の才能にやっと気付く。父親はビリーを応援することを決意。ビリーはロイヤルバレエ学校の受験に改めて挑戦し、合格する。

14 年後、ロンドンのシアター・ロイヤル・ヘイマーケットの客席に父親と兄が、その隣には親友のマイケルがいる。家族の来場を伝えられると、舞台裏に控えるビリーの精悍な顔にかすかながらも優しい笑みが一瞬浮かぶ。息子の姿を待つ父親の目はすでに潤んでいる。

ビリーが、大きな白鳥として舞台上に羽ばたく…。

公開当時、映画 CM が比較的可ミカルな作りであったこともあり、見る前のイメージと見終わった直後のインパクトとの落差が大きく、良い意味で裏切られたことを覚えている。

25 歳に成長したビリー（アダム・クーパーという世界的バレエダンサー）が白鳥として舞台上に飛び立つ最後の一瞬は、アポロ・クリードに勝利したロッキーのエンディングシーン（『ロッキー』／1976 年／アメリカ）に相通じる力強さを感じるものであった（なお、この映画では「バレエは女の子が習うもの」という父親の偏見に沿う形でボクシングとバレエとが対照的なものとして取り扱われている）。

この映画を“イングリッシュ・ドリーム・ムービー”と評するものもあるが、それも頷けるような気がするところである。

ビリーがバレエを始めたことを無心に喜ぶ祖母や親友のマイケルもいい味を出している。なかでも、一番味があるといえるのは、父親の理解を得られずに悶々としていたビリーに手を差し伸べてバレエを教えたウィルキンソン先生である。ロイヤルバレエ学校に合格したビリーが報告に行っても、恩着せがましいそぶりなど決して見せない。清々しくてカッコよい。

本作は、本国イギリスのほか、各国でローカル版のミュージカルが製作されている。日本のローカル版ミュージカルの初演は 2017 年。2020 年夏には再公演が予定されているとのことである。